

【 復活のトロパリ 第5調 】

しんじゃよ、ちちとせいしんとともにはじめ
 信者 父 聖神 共 始

なきことばわがすくいのためえに
 言 吾 救 爲

どうていちよよりうまれしものをほめうとうて
 童 貞 女 生 者 を 讃 歌

おがむべし、かれあまんじてそのみにて
 拜 彼 甘 其 身

じゅうじかにのぼおりしをしをしのびそのこ
 十 字 架 上 お り し を し の び そ の こ
 十 字 架 上 死 忍 其 光

うえいのふくかつにてしせしものを
 榮 復 活 つ に て し せ し も の を
 榮 復 活 死 者

ふくかつせしめたまあえばなあり。
 復 活 給

【 日本の聖使徒ニコライのトロパリ 第4調 】

しととひとしくどうざなるもの、ちゅう
 使 徒 等 同 座 者 忠

じつにしてしんちなるハリストスのえきしゃ、せい
 實 神 智 役 者 聖

なるしんにえらばれたるふえ、ハリストスのあい
 神 撰 笛 愛

にみちたるうつわ、わがくにのこう
 満 器 我 國 光

しよ お しゃ、あしとしゆきょうせいニコライ
 照 お 者、亜使徒主教聖
 よ、なんぢのぼくぐんのため、および
 爾 羊 群 爲 あ め、および
 ぜんせかいのため、いのちをたもうせい
 全世界 爲 生 命 賜 聖
 さんしゃにいのりたまえ。
 三者 祈 給 え。

【 日本の亜使徒ニコライのコンダク 第4調 】

こうえいはちちとこ おとせいしんにき
 光 榮 父 子 お と 聖 神 歸
 す、
 せいせいしゃあしとせいニコライよ、わが
 成 聖 者 亜使徒聖 我
 くになんぢをたびびとおよびいほうじんとうけ
 國 爾 旅 人 及 異 邦 人 受
 しに、なんぢははじめわがくににおいておの
 爾 初 我 國 於 己
 れをがいらいしゃとしりたれども、ハリストスの
 外 來 者 知 れども、ハリストスの
 ひかりとあたたかきをながし、なんぢのて
 光 暖 流 爾 敵

きをぞくしんのことなあし、かれらにか
 屬 神 子 爲 彼 等 神
 みのおんちようをあたえ、ハリストスのきょうかいをたて
 恩 寵 與 教 會 建
 たり、いまこのきょうかいのためにいのり
 今 此 教 會 爲 祈
 たまあえ、けだしわれらそのしよしはなん
 給 あ え 蓋 我 等 其 諸 子 爾
 ぢによぶ、わがよきぼくしゃよ、よろこ
 呼 我 善 牧 者 慶
 べよ。

【 復活のコンダク 第5調 】

いまもいつもよよにい、アミン。
 今 何 時 世 世
 わがきゅうせいしゅ、ひとをあいするしゅ
 我 救 世 主 人 愛 主
 よ、なんぢはぢごくにくだあり、ぜん
 爾 地 獄 降 全
 のうしゃとしてそのもんをやぶり、ぞう
 能 者 其 門 壊 り 造
 せいしゅとしいて、ししゃをおのれとともに
 成 主 死 者 己 偕

ふ く か つ せ し め 、 し の は り を く じ き
復 活 死 刺 折

ア ダ ム を の ろ い よ り と き た ま え り 。 ゆ え に
詛 釋 給 え り 故

わ れ ら み な よ ぶ 、 し ゅ よ 、 わ れ ら を す く い
我 等 皆 呼 主 我 等 救

た ま あ え 。
給

司祭) (黙誦：聖なる神、^{せい かみ せいじゃ うち いこ}聖者の中に息い、^{せいさん こえ もつ かしょう}セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
ヘルヴィムより^{さんえい}讚榮せられ、^{ことごと}悉くの^{てんぐん}天軍より^{ふくはい}伏拝せられ、^{ばんぶつ む ゆう}萬物を無より有と
なし、^{ひと なんぢ ぞう しょう}人を爾の像と肖とに依りて造り、^{よ つく なんぢ もるもろ たまもの もつ これ かざ}爾が諸の賜を以て之を飾り、
^{ねが もの ちえ めいご あた つみ おこな もの す}願う者に智慧と明悟とを與え、^{そのすくい ため つうかい}罪を行^すう者を棄てずして、其救の爲に痛悔
^{た われらいや ふとう なんぢ しょぼく こ とき おい なんぢ せい}を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
^{さいだん こうえい まえ た なんぢ とうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの}る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と
^{しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ}なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
^{もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ}以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
^{せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え たま せい}を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる
^{しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ}生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、^{けだしわ かみ なんぢ せい}爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に^{われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ}献ず、今も何時も世世
に、

ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き ぎ 、 せ い な る
 聖 なる 神 、 聖 なる 勇 毅 聖

じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
 常 生 の 者 我 等 を 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き ぎ 、 せ い
 聖 なる 神 聖 なる 勇 毅 聖

な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
 常 生 の 者 我 等 を 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き ぎ
 聖 なる 神 聖 なる 勇 毅

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 の 者 我 等 を 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
 光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。
 歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 常 生 の 者 我 等 を 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
 聖 なる 神 聖 なる 勇

き ぎ 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を
 毅 聖 常 生 の 者 我 等 を

あ わ れ め よ 。
 憐

司祭) (黙誦：^{しゅ な よ き もの あが ほ}主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、^{ぎ もの なんぢ そのくに}ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
^{こうえい ほうざ あ つね あが ほ いま いつ よよ}の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、)

【 ^{プロキメン} 提綱 主日第5調 】

司祭) ^{つつし き しゅうじん へいあん}慎みて聽くべし、衆人に平安、

誦經) ^{なんぢ しん}爾の神にも、

司祭) ^{えいち}睿智、

誦經) ^{しゅ なんぢ われら たも われら まも こ よ えいえん いた}プロキメン、主よ、爾は我等を保ち、我等を護りて、斯の世より永遠に至らん、

しゅよ、なんぢはわれらをたもち、われらをまも
 主 爾 我 等 保 我 等 護
 りて、このよおよ り えいえんにいい
 斯 世 永 遠 至
 たらん。

誦經) ^{しゅ われ すく たま けだしぎじん た}主よ、我を救い給え、蓋義人は絶えたり、

しゅよ、なんぢはわれらをたもち、われらをまも
 主 爾 我 等 保 我 等 護
 りて、このよおよ り えいえんにいい
 斯 世 永 遠 至
 たらん。

誦經) ^{しゅ なんぢ われら たも われら まも}主よ、爾は我等を保ち、我等を護りて、

このよおよ り えいえんにいい たらん。
 斯 世 永 遠 至

【 アポστόロス 使徒經 110 端 ロマ書 12 章 6 節～14 節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒パウエルが羅馬人に達する書の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦經) 兄弟よ、我等に與えられし恩寵に依りて、我等賜を獲ること齊しからざるが故に、

預言を得ば、信の度に依りて預言せよ。役事を得ば、役事に居れ、教うる者あらば、教えよ、

勸慰を爲す者は勸慰を爲せ、施す者は、朴直にして施せ、理むる者は心を竭くして理

めよ、矜恤を爲す者は、歡びて矜め。愛は偽なかるべし、惡を惡み、善を親め、

兄弟の愛を以て相愛し、禮儀を以て相譲れ。勤に怠る勿れ、神を熾せ、主に事

えよ。望を以て喜べ、患難に遇いて忍べ、祈禱に恒なれ、聖徒の需むる所に供せ

よ、務めて遠人を迎えよ。爾等を窘逐する者を祝福せよ、祝福して、詛う勿れ。

(比較用 口語訳) 兄弟たちよ。わたしたちは与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っているので、もし、それが預言であれば、信仰の程度に応じて預言をし、奉仕であれば奉仕をし、また教える者であれば教え、勧めをする者であれば勧め、寄附する者は惜しみなく寄附し、指導する者は熱心に指導し、慈善をする者は快く慈善をすべきである。愛には偽りがあるてはならない。悪は憎み退け、善には親しみ結び、兄弟の愛をもって互にいつくしみ、進んで互に尊敬し合いなさい。熱心で、うむことなく、靈に燃え、主に仕え、望みをいだいて喜び、患難に耐え、常に祈りなさい。貧しい聖徒を助け、努めて旅人をもてなしなさい。あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福して、のろってはならない。

【 アリルイヤ 主日第5調 】

司祭) 爾に平安、

誦經) 爾の神にも、

司祭) 睿智、

誦經) アリルイヤ、

ア リル イ ヤ 、 ア リル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{しゅ われなが なんぢ じれん うた わ くち もつ よよ なんぢ しんじつ つた} 主よ、我 永く 爾 の慈憐を 歌い、我が口を以て 世に 爾 の眞實を 傳えん、

ア リル イ ヤ 、 ア リル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

誦經) ^{けだしわれい じれん なが た なんぢ なんぢ しんじつ てん かた} 蓋 我 言う、慈 慈は 永く 建てられたり、 爾 は 爾 の眞實を 天に 固めたり、

ア リル イ ヤ 、 ア リル イ ヤ 、
ア リ ル イ ヤ 。

司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する 主宰よ、我が 心 に神を知る 智慧の 浄 き 光 を 輝 かし、我が 思念
^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、 爾 が福音の 教 を 悟らしめ 給え、我が 衷に 爾 の福たる 誠 を
^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よろこ ところ} 畏るる 畏 をも入れて、我等が 悉 くの肉體の 慾を 踏み、凡そ 爾 の 喜ぶ 所
^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を 思い且つ 行いて、 属 神の 生活 を 過ぐるを 致させ 給え、 蓋 ハリストス 神よ、
^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん} 爾 は我が 靈 と 體 との 光 照 なり、我等 爾 と 爾 の無原の 父 と 至聖至善 にし
^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ} て 生命 を 施 す 爾 の神 とに 光 榮 を 獻ず、今も何時も 世に、アミン。)

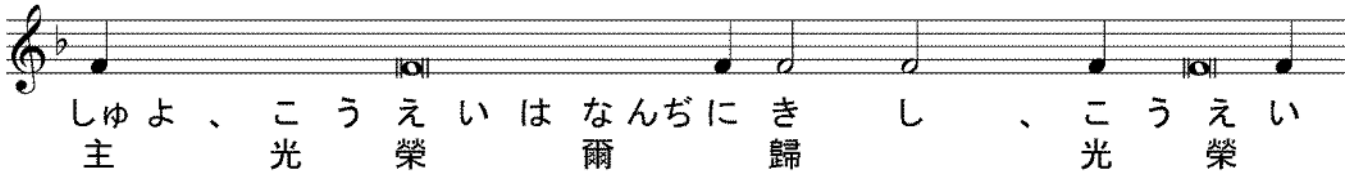
【 エヴァンゲリオン 福音經 マトフェイ福音書 29 端 9 章 1~8 節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん} 睿智、 肅 みて 立て 聖 福音 經 を 聴くべし、 衆 人 に 平安、

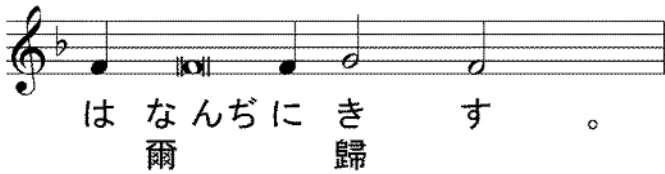


なんぢのしんにも。
爾 神

司祭) マトフェイ傳の聖福音經の讀、



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 し 光 榮



はなんぢにきす。
爾 歸

司祭) 謹みて聴くべし、彼の時イイス舟に登り、濟りて己の邑に來れり。視よ、癱瘋を

患いて牀に臥せる者を彼に昇き來れる者あり、イイス彼等の信を見て、癱瘋の者に謂

えり、子よ、心を安んぜよ、爾の罪は爾に赦さる。時に或學士等己の衷に謂えり、

彼は褻す言を言う。イイス其意を見て曰えり、爾等何ぞ心の中に惡しきことを懷

う、蓋爾の罪赦さると言い、或は起きて行けと言うは、孰か易き、然れども爾等が

人の子の地に在りて罪を赦す權あることを知らん爲、(是に於て癱瘋の者に謂う、) 起き

て、爾の牀を取りて、爾の家に往け、彼即起きて、牀を取りて、其家に往けり。民

之を見て奇と爲し、是くの如き權を人に賜いし神を讚榮せり。

(比較用 口語訳) その時、イエスは舟に乗って海を渡り、自分の町に帰られた。すると、人々が中風の者を床の上に寝かせたままでみもとに運んできた。イエスは彼らの信仰を見て、中風の者に、「子よ、しっかりしなさい。あなたの罪はゆるされたのだ」と言われた。すると、ある律法学者たちが心の中で言った、「この人は神を汚している」。イエスは彼らの考えを見抜いて、「なぜ、あなたがたは心の中で悪いことを考えているのか。あなたの罪はゆるされた、と言うのと、起きて歩け、と言うのと、どちらがたやすいか。しかし、人の子は地上で罪をゆるす權威をもっていることが、あなたがたにわかるために」と言い、中風の者にむかって、「起きよ、床を取りあげて家に帰れ」と言われた。すると彼は起きあがり、家に帰って行った。群衆はそれを見て恐れ、こんな大きな權威を人にお与えになった神をあがめた。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
 主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。
 爾 歸

※聖体礼儀3（金ロイオアン）へ